

2025年3月16日 説教「笛を吹いても」

ルカの福音書7章28～35節

今回は7章18～27節から学びました。獄中のバプテスマのヨハネが弟子達を送って、イエスが誰であることをたずねました。それに対し、イエス・キリストは自らのなしていることを報告するようと言われました。そして、人々が荒野に、他でもなく道備えの預言者ヨハネからバプテスマを受けるためであった事を確認しました。

#### 1. ヨハネのバプテスマを受けた者と受けなかった者 (28～30節)

- ①ヨハネと神の国の者 (28)「**あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりもすぐれています。**」

ヨハネについての言及は続きます。ここでは、女から生まれた者のなかで、ヨハネは最も霊的に優れていると断言します。しかし、そのヨハネですら、神の国においては一番小さいものよりも劣ると言われたのです。つまり、天と地における優劣は比較ができないほど相違があるということです。

- ②ヨハネの教えを聞いた民は (29)「**ヨハネの教えを聞いたすべての民は、取税人たちさえ、ヨハネのバプテスマを受けて、神の正しいことを認めたのです。**」

しかしそれでも、ヨハネは地上では特別でした。というのも、多くの人々は、取税人たちですら、ヨハネからバプテスマを授けられた時に本当に悔い改めたのです。つまり、ヨハネから教えを受けた人々は、受洗して義なる神の前に自らの罪を鮮明に示されて、恵みの神による赦しにあずかったと言われたのでした。

- ③パリサイ人や律法学者たちは (30)「**これに反して、パリサイ人、律法の専門家たちは、彼からバプテスマを受けなくて、神の自分たちに対するみこころを拒みました。**」

反対に、パリサイ人や律法学者たちについてイエスは、彼らがヨハネを侮り、ヨハネからバプテスマを受けること拒否したといます。また、彼らは神の前にせつかくの恵みを無にして、自らの罪を悔い改めることをせず、神の御心に反するものだったと言われました。

#### 2. 子どもたちの言い交しのたとえ (31～32節)

- ①この時代の人々は (31)「**では、この時代の人々は、何にたとえたらよいでしょう。何に似ているでしょうか。**」

イエスは視点を変えて話されます。「この時代の人々」というのは、キリストを認めない人々です。イエスはこの人々について、31節から34節にかけて語られます。この時代の人々を何にたとえたらよいでしょうか、と問われます。また、何に似ているでしょうか、ともたずねられます。イエスはたとえをもって、よく話されましたが、ここでもたとえで語られます。

- ②市場の子どもたちに似て (32)「**市場にすわって、互いに呼びかけながら、こう言っている子どもたちに似ています。**」

たとえの設定は市場に座って、呼びかけ合う子供たちです。市場とは、路上の商店が並び、いろいろな人々が行き交う場所です。子供たちもそこに集まってきて、いろいろと言ひ交しているというのです。

③踊らず、泣かず (32) 『**笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかった。甲いの歌を歌ってやっても、泣かなかった。**』

市場で子供たちはが、こんなことを言っているというたとえ話です。『笛を吹いたとしても、君たちは踊らないね。』。楽しい雰囲気を作ろうと、笛を吹いても誰も乗ってこず、メロディーに合わせて踊る人はいない。また、逆に悲しい場面を想定して、甲いの歌をうたう人があっても、誰も泣こうとはしないというのです。

3. 子どもたちが証明 (33~35 節)

①ヨハネについての意見 (33) 「**というわけは、バプテスマのヨハネが来て、パンも食わず、ぶどう酒も飲まずにいると、『あれは悪霊につかれている』とあなたがたに言うし、**

ここからはたとえの解き明かしです。まずは、少し前まで話していたバプテスマのヨハネについてです。ヨハネは質素な食生活をしていました。いなごと野蜜を常食としていたのです(マルコ 1:6)。そのヨハネが、パンもぶどう酒も飲まないしていると、(この時代の)人々は、「あれは悪霊につかれている」と見当はずれの批判をするのです。ヨハネが悔い改めを説いても、知らん顔をするばかりなのです。

②イエスについての意見 (34) 「**人の子が来て、食べもし、飲みもすると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ』と言うのです。**

さらに、「人の子」イエスが来て、取税人や罪人たちの中に入って、彼らとともに食べ、飲んだりしていると、批判するのです。「あいつは食いしん坊だ、大酒飲みだ、墮落している奴らの仲間だ」と。彼らは、そこでイエス・キリストが語っていた御言葉のことなどは、全然耳に入っていないのです。また、弱い人々たちの心を理解しようとしません。笛を吹けど踊らず、甲い歌を歌っても悲しまずといった姿なのです。

③知恵の正しいこと (35) 「**だが、知恵の正しいことは、そのすべての子どもたちが証明します。**

「知恵」とは、人間の知恵ではなく、神の知恵のことです。この時代の人々(31 節)は人間の知恵によって生きています。神を求める者は、神の知恵を求めます。旧約聖書のヨブ記、箴言、伝道者の書などは知恵文学と言われます。そこには、神の知恵が示されています。また、新約聖書には「霊的な知恵」(コロサイ 1:9)とか、「上からの知恵」(ヤコブ 3:17)などと出てきますが、イエス・キリストの御言葉には知恵が溢れています。その知恵をいただいでく者たちの証しが、神の知恵の正しさを証明することになるというのです

《結論》 今朝の聖書箇所において、二つのことを考えます。

第一に、イエス・キリストはバプテスマのヨハネは女から生まれた者では、霊的に最もすぐれていると述べつつ、そのヨハネですら、神の国の一番小さい者より小さいという点です。このキリストのご見解はある面ではとても大きな慰めです。なぜでしょうか。それは、私たちは地上において、愚かにも霊的な事柄についてもランク付けをしようとするからです。ここで、イエスがヨハネを霊的には最も優れた人だと述べていますが、別にランク付けをしているわけではありません。聖書の歴史を紐解けば、アブラハムがいて、モーセがいて、エリヤがいて、イザヤ・・・と霊的な巨人はいるのです。ここで、イエスはそういう人々と比べているわけではありません。そういうことを言おうとしているのではなく、ヨハネほどの優れた者もそれは地上でのことであり、天上にある者とは比較ができないというのです。つまりは、私たちは召されて主のもとにおかれるのですが、それは地上ではヨハネやモーセなどですら味わえなかった恵みに浴するということなのです。だからこそ、御国へのあこがれがあつて不思議ではありません。キリストにある者に平等に与えられる恵みです。ならばと、ある人は地上においては適当な歩み方をしていればよいと考えるかもしれません。しかし、それは違います。御国で恵みをうける私たちは、主を見上げて歩むときに、地上においても大きな恵みをいただけるのです。私たち罪深い者たちに、主は天の恵みに触れさせてくださるのです。盲人の女性讚美歌作詞家であったクロスビーはこう歌っています。「ああうれし、わが身も、主のものとなりけり、うき世だにさながら、あまつ世のこちす(讚美歌 529)。主と密接に歩む中に、この世にいなながら天国いるような心地がすると歌ったクロスビーの信仰にもとづく証しは、厳しい時代を生きる者達にヒントを与えてくれます。

第二に、イエスが示されたたとえから考えます。子供達が言い合っているなかで、「笛吹けど踊らず」「甲いの歌にも泣かず」とありましたが、それはヨハネが悔い改めを説いても耳を傾けず、その外側の行動だけを切り取って、悪霊に取り付かれているとするその時代の人々に問いかけられました。また、救い主イエスが来られてもその外側だけを切り取って、罪人の仲間だなどと言い放つ人々にも問いかけられました。しかし、そうした面は私たちの内にも潜んでいるのではないのでしょうか。事柄の本質を見るのではなく、外側で見て、事柄を判断し人を裁いてしまうという面がないのでしょうか。パリサイ人たちがしていたのと同じことを、私たちがもししてしまう可能性があります。だからこそ、ここでイエスが 35 節で「知恵の正しいことは、その結実するところが証明する」という言葉に注目したいのです。そうです。キリストの十字架こそが、あなたにとっての信仰の知恵の源です。また、キリストの復活こそが、あなたにとっての知恵の源なのです。十字架と復活はあなたのためであることを覚えましょう。十字架と復活の信仰の土台の上に立つ時に、必ずや主のは霊の実りを備えて下さいます。賛美を住まいとしてくださる主を喜ばしく礼拝しつつ、宣教へと進ませていただきます。